

力強い夏の日差しが、木々に注がれている。  
まだら模様の影が薬屋リーファの屋根を飾った。  
今日の午後は休診日だという。

「庭師さん」

薬草園の入口をノックしたルルは、落ち着いた色のワンピースに身を包んでいた。

「花束を作ってもらいたいのだけど、いいかしら」

「<sup>うけたまわ</sup>承りましょう。どんな花束をご希望ですか？」

「お墓参り用のものを、ここの花で作ってもらいたいの」

「……もしかして、ご両親に？」

ルルは眉を下げた。

「今日で両親が亡くなって半年なのよ。だから、お願い」

「うん、まかせて」

「片方は白い花とローズマリーを、もう片方には赤い花とタイムを  
いれてほしいの」

「ご両親が、好きなものだった？」

「そうよ。母が白で、父が赤。ローズマリーはよく料理に使っていたのよ。父はタイムを使ったスープが好きで……」

「そうなんだね。作ってくるよ」

「お願い」

ローズマリーを使った肉料理は、ルルもよく作る。  
そしてタイムのスープも、最近飲んだばかりだ。  
会ったことはないのに、ルルの中に彼らを見たような気がした。

「これでどうかな？」

「とても素敵だわ。そろそろ行かなくちゃ」

「いってらっしゃい」

「ええ、またあとで」

花束を抱えたルルはワンピースを <sup>ひるがえ</sup> 翻し、薬草園をあとにする。  
俺はそんなルルの背中を、見送った。



出かけてから結構な時間がたったけれど、空はまだ明るかった。  
家に戻ると、ツバメは入口の花壇をいじっているようだ。

「ただいま」

「あ、おかえり」

新しい苗を広げている姿に、私はため息をつく。

「もう仕事は終わってる時間じゃない？」

「そうかな。日が長いから全然わからなかったよ」

「植物のことになるとすぐにそうよね」

「まあね」

「褒めてないわよ」

「あれ、そうだった？」

笑い、立ちあがるツバメ。  
彼を追って、視線があがる。

「ルルはどうだった？」

「問題ないわ。両親がお世話になった家にも挨拶回りしていたの」

「そうだったんだね。お疲れさま」

「……母も、こうしてよく花壇をいじっていたわ」

「本当？ 話が合いそうだなあ」

「きっと合うわよ。ここは白い花がいい、とかデザインしたりして。でも父が口を出すの。『いいや、そこは赤がいいな』って」

「仲がいいんだね」

「そうね。とても……」

「……ほかには？ ご両親との思い出って、ある？」

「よく父の診察を見ていたのだけど、母と配達に行くのも好きだったの。配達中、母から料理の話をよく聞いて。あの草は食べられるのよとか、植物の話もしてくれていたわ」

繋いだ手のぬくもりを今になって——思い出すなんて……。

「あ……」

吹き抜ける風は涼を運ぶ。

対して、頬を伝う涙は、あたたかかった。

「ルル……」

「ご、ごめんなさい」

「謝らないで。大丈夫」

ツバメは手袋を外す。

そして、涙を拭う私の手を、優しく止めた。

触れられた彼の手も、あたたかくて。

ツバメは一輪の花を摘み、涙をこらえる私に差し出した。

「植物は嘘をつかない。だから、植物の前では素直になれる。……泣きたいときは、泣こうよ」

「ツバメ……」

受け取った花を手にも、涙と思いがぼろぼろとあふれ出てくる。

「……さみしい」

「うん」

「両親とまた、話したい」

「うん」

「独りは、こわいわ」

それは、心の底にあった気持ち。

両親が死んだときから、私の心を占めていた孤独だった。

「ごめんなさい。こんなこと、誰にも、言えなくて」

「ううん。ルルはさ……独りじゃないよ」

彼の言葉に、思わず顔をあげた。

目の前にはツバメがいて、琥珀<sup>こはくいろ</sup>色の瞳はこちらを、見ている。

「今は、俺がいる」

「え……？」

心臓が——跳ねた気がした。

「なんてね」

そう言いながらツバメは、風になびく私の髪に少しだけ、触れた。

時が動き出したように、空はどんどんと暗くなっていく。

輝きだしたふたつの星々が、私たちを見つめていた。